令和六年度　道伝えの日　芭蕉忌句会　入賞句

○兼題句「芭蕉忌」

［俳人協会岐阜県支部　大野鵠士選］

三〇、芭蕉忌や虫が当たりて日の障子　山本　史子
虫も芭蕉を慕っているのかと思わせるところに心引かれる。元禄七年陰暦十月十二日の小春の日の午後を偲ばせる詠みぶりである。

六、尼寺に一門集ひ桃青忌　楢本　洋子
「一門」とは作者の一門であろう。ところが、智月や園女ら、女弟子にやさしかった芭蕉を思わせる。たおやかな空気に満ちた句。

四七、芭蕉忌や棹ごとおちる渡り鳥　吉田　紀美子
この渡り鳥というのは雁ででもあろうか。堅田の落雁を思わせ、芭蕉の「病雁の」の句に思い至る。重量感のある句だ。

互選［一席］

二二、時雨忌や軒下少しゆづりあふ　徳島　ふみ子

互選［二席］

三四、芭蕉忌や小さき罅（ひび）あるくいな笛　山崎　元宏

互選［三席］

一〇、芭蕉忌や彩雲誘ふ旅心　大滝　篤子

二六、通らねば道も途絶へし芭蕉の忌　田村　喜栄

四三、芭蕉忌の風のこゑきく大枯野　役田　八重子

○当季雑詠句（秋・冬）

［俳人協会岐阜県支部　大野鵠士選］

一一、僧の説く娑婆よ浄土よ曼珠沙華　柴田　恭子
僧という他者の言動にこと寄せ、作者自身の価値判断は何も示さないものの、生きてきた人生の重みをかけた問いかけの一句となっている。

二六、手の平を返して今朝の風ぞ秋　田村　喜栄
秋という季節の、朝という時間帯を、身体の一部である掌の鋭敏な感覚にあづけて把握した。

三七、翅崩れ草間に沈む冬の蝶　竹本　かほる
人の存在や気配を感じさせない、どこか無機質な点に魅力を感じさせる句。（句形再考の余地ありか？）

互選［一席］

一六、つくばいの石噛みてゐる秋茜　長瀬　理々子

互選［二席］

一四、たわいなき母との会話栗を剥く　横山　美保子

互選［三席］

三、襟巻を膝に下ろして法話きく　山下　子紀

令和六年度　道伝えの日　芭蕉忌句会　高校生の部　入賞句

○当季雑詠句（秋・冬）

・飛驒俳句会代表　伊藤浩子選

［吉城高等学校］

入賞　**就活や兄の背中は秋時雨**　二年　益田（ました）　侑英（ゆきえ）

就職活動中の兄は、いつものように会話の相手をしてくれないしいつもの明るさが見えない。きっと今日の時雨のように暗くて寒い気分なんだろうと妹は心配している。喧嘩もするけど大好きな兄を思いやる気持ちが滲んでいる。

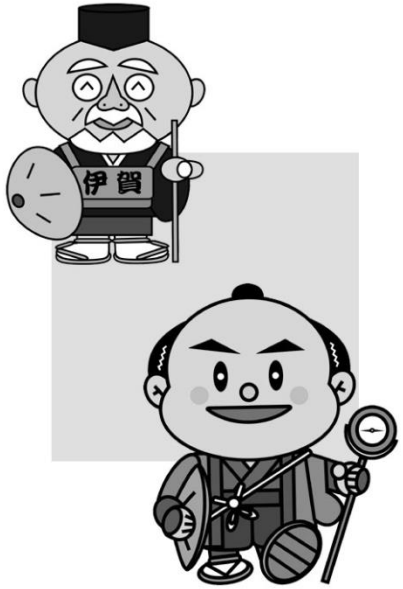
入賞　**茶碗蒸し銀杏なしはわたし用**　一年　森本（もりもと）　真帆（まほ）

銀杏が嫌いなのかアレルギーなのか。母は銀杏抜きの特製を私のために作ってくれる。母の優しさと私の存在感とあったかい茶碗蒸しに一家の笑顔が見えてくる。

入賞　**顔見えず会話で終わる道の秋**　一年　佐藤（さとう）　芙有佳（ふうか）

歩きスマホだろうか。電話の声より文字にした方が面白い表現ができて会話が楽しめる作者かも知れない。季語「道の秋」は珍しい。秋の道・落葉道などもいいと思う。

［飛驒神岡高等学校］

入賞　**ぽつぽつと母の小言と秋時雨**　二年　濱本（はまもと）　小羽（こはね）

母の小言はしとしとと長く続く。ぜーんぶ解っています、その通りですと心で呟きながら終わりを待っている。秋時雨と小言の取り合わせが面白い。